

幼稚園教育要領が
変わる時

宮里 暁美
高橋 陽子
松島のり子
上坂元 絵里
浜口 順子

上坂元 今回は、一九八九（平成元）年の幼稚園教育要領改訂後の時期に書かれた原口純子氏の文章（この後の19〜23ページに転載）を手がかりに座談会を始めたいと思います。

今年から新しい要領・指針がまた実施されていますが、要領・指針が定期的に改訂（定）されるようになって三十年です。そのたびに現場でどんなふうを受けとめ、生かし、つなげてきたのか、これからのことも含めてお話し

していきけたらよいのではないかと思います。

今と通じるものがある

高橋 三十年前って、一九八九年という数字で見るととても昔のような気がしますが、原口先生の文章を読むと、今と変わらない部分が多いなと思いました。

私が一番思ったのは、保育者の資質が問われているというのは、昔も今も変わらないということ。また、定員とか施設、設備が変わらなければ保育はなかなか良くはならない、と述べられていて、三十年たった今はどうなっているのかかと思いました。



▲高橋陽子氏

宮里暁美（文京区立お茶の水女子大学こども園園長）
松島のり子（お茶の水女子大学助教）
浜口順子（お茶の水女子大学教授）

高橋陽子（お茶の水女子大学附属幼稚園教諭）
上坂元絵里（お茶の水女子大学附属幼稚園副園長）

最後のほうの文章で、走り回る四歳児を取り上げたところが面白い。今、本園でも四歳児がいろいろはじめていて、内にあるものを出している、といった話題が出てきたので。

それから、原口先生は、保護者に向けて幼児教育の何を、どう伝えていくか、例えば、スライドやビデオを使うと書いていて、今と通じるものがあるなと感じました。

変わること・変わらないうこと

松島 平成元年の改訂は、大きな改訂として学生ときに学びました。それまでの一九六四（昭和三十九）年に改訂された要領に、幼児教育のあり方が方向づけられてしまったところを反省して大きく変わった、という感じを受けとめていたのですが、原口先生の文章の冒頭に、要領が変わったと言っても、保育の在り方や方法が変わるわけではない、と書きだされていたのが、とても印象的です。今

も新しい体制のもとで始まるう

としていくけれ

ど、果たして何

が変わるんだろ

う？ と思っ

ています。大学

も学生から疑問

が出ていました。

要領が変わること

で、変わ

らないところも

あるけれど、

変えていこうと

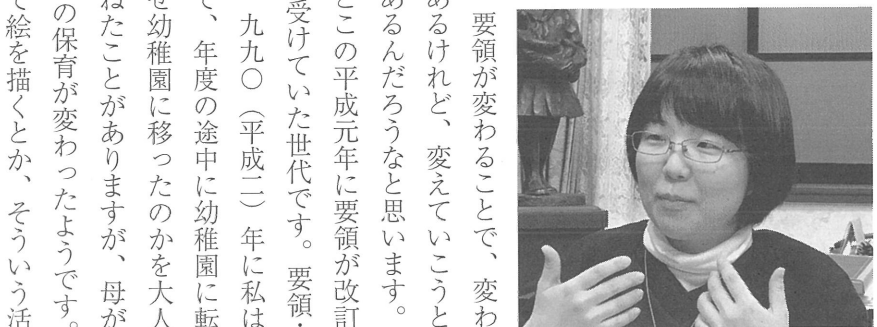
している何か

があるんだろ

うなと思います。

私は、ちょうど

この平成元年



▲松島のり子氏

された後、保育を受けていた世代です。要領・指針が始まった一九九〇（平成二）年に私は保育所に入所して、年度の途中に幼稚園に転入しました。なぜ幼稚園に移ったのかを大人になってから尋ねたことがあります。母が言うには、保育所の保育が変わったようです。クレヨンを使って絵を描くとか、そういう活



▲宮里暁美氏

動をあまりしなくなったと聞いた覚えがあります。要領・指針の改訂は、当時、保育の現場に何か影響をもたらしたものがあつたのだらうと思います。要領・指針の改訂により現場がどう動くのか、歴史的にも関心が及ぶし、今これからのことにも興味津々です。

平成元年改訂は、流れをつくつた転換点

宮里 私は、平成元年改訂のときが幼稚園に勤めて十年目くらいでした。いろいろ考えさせられた改訂でしたね。原口先生も「遊びを通して自主性を育てる保育を目ざして来た本園にとつて」

と書いてあるように、そういう保育を大切にしていた園から見れば、よかつた

と思える改訂だったと思うのです。幼児教育のあり方が本来あるところに戻つたように思えて、本当によかつたと感じたんですけれど、この改訂によって、放任になってしまい、保育がだめになるのではという意見も出てきて、私は驚きました。

高橋 私は、私立の幼稚園に勤め始めた頃でした。公立幼稚園は、国の政策が直に影響すると思えますけど、私がいた幼稚園は、課題が午前二つ、午後一つというところでした。いろいろな園があると思いますが、勤務した園では改訂の前後で保育に大きな変化はありませんでした。

宮里 公立幼稚園は、改訂に対してしっかりと向きあいます。何が危惧されたかということ、放任になり、子どもが育たなくなるとか、先生たちがなんにもしちゃいけないとかかということでした。そんなこと、要領ではどこにも言っていないですよ。「一人一人の発達の



特性に応じた指導」とか「ふさわしい生活の展開」とか「総合的な指導」と言っている

のに、なぜそのような誤解を生んだのかなと思議に思いました。私自身は、一人ひとりを大事にする保育をずっと心がけて

いましたから、それでいいんだよと応援された気持ちになって、うれしい改訂でしたね。

上坂元 私はこの附属幼稚園で仕事をしていました。ちょうどこの前後に『幼児の教育』の巻頭言を河野重男先生（当時お茶の水女子大学学長）が書かれています。河野先生が「幼稚園教育要領に関する調査研究協力者会議」

の座長をされていたので、先輩の先生たちがこの改訂をととても喜んでいました。

宮里 この改訂を受けて保育を変えたいと思う園が出てきて、附属幼稚園を参考にしようとしたという話も聞きました。

上坂元 いきなりやろうとすると、本当は手が出せなくなつて、それでいいのだろうか、自分たちが動けなくなつてしまうという悩みが聞かれました。この時の改訂が以後三十年の流れをつくつた大きな転換点だと、あらためて気づかされます。

小学校の学習指導要領との関連

宮里 「心情、意欲、態度」という言葉が出たのもこの改訂ですよね。子どもの内面に何が育つのか、ねらいの書き方も変わつて、その後も踏襲しているんですよね。

高橋 今年、東京都の公立幼稚園の研修会に参加させてもらったとき、無藤隆先生の講演

を聞く機会がありました。改訂について、何も変わらない、幼稚園でやっていることはそのままでもいいとおっしゃっていました。小学校の先生にしっかりと幼児教育を伝えてほしい。小学校はスタートカリキュラムの実施も含め、新しい改訂でいぶん変わる、と。小学校は内容的に大きな変化があるけれども、幼稚園は内容的に大きな変化はない、と言われたのが印象的です。

浜口 平成元年は、小学校の学習指導要領も大きく変わり始めた時期です。一九九〇年代の初め、文部科学省が「新しい学力観」、つまり「自ら学ぶ意欲や、思考力、判断力、表現力などを学力の基本とする学力観」を学習指導要領の中で強調するようになった時代で、週休二日や生活科が始まりました。「生きる力」が着目されるちよつと前の段階ですね。緩やかに、詰め込みではない教育へ。幼稚園にあって追い風が吹いてきたという環境があった

かと思います。

改訂を受けて現場では

浜口 6領域が5領域になったり、「人間関係」「環境」「表現」という新しい領域になったりしたことで、現場に混乱はなかったですか？
当時の雰囲気をもっとお聞きしたいです。

宮里 活動としては造形表現的なものと音楽的なものをまとめて「表現」としたので、専門性の耕し方が曖昧になってしまったかなと思うところはあります。

浜口 まだ若手だった上坂元先生がその頃印象的だったことは？

上坂元 私は三年目で、先輩たちは「こちらに風が吹いてきた」と話し、新しく来た人たちは「大変なんです」



▲上坂元絵里氏

と混乱していました。それから、公開保育のときなどに、自分たちのやっている保育を変えたいと訪問されてくる先生が多くいました。思い切って今までのやり方を変えたい、どうしたらいいか手がかりを探しに来たという方がいらしたのをよく覚えています。

宮里 変わろうとするタイミングがいろいろあるけれど、この時に変えた園が結構あるんじゃないかしら。調査したら面白いと思う。

より良くなろうと努力する園は公立私立の別なくいろいろあったのではないかな。今回の改訂でもそのような機運を感じます。この改訂を受けて良くなろうとしたというのは、確かにあったと思います。

上坂元 要領・指針が変わって、果たして何が変わるのかということですね。

松島 今年度後期の授業で、改訂された要領・指針を学生と読みました。幼稚園・保育所・認定こども園で内容をそろえたりと、確かに

変わったところがある。一方、保育で大事にしたこととか、環境を通しての教育とかは変わらずに大事というところもある。より良くしていく必要があるから改訂があると

考えると、何も変わらない、何も変えない、ということはないのだと思います。私は今現場にいないので外から見た感じでしか言えないけれど、要領・指針が変わったことで保育の現場は大きくは変わらないのかもしれない。それでも、現場の先生方の意識のところでは少なからず何かしらの影響があるのではないかと思うのです。子どもにかかわるときに重点を置きたいところや言葉掛けなど、先生方は瞬間瞬間に判断されて動いていらつしやると思うので、そこに何かしら改訂された



要領・指針が影響するのかなと思います。

上坂元 原口先生も、「問題はその解釈と運用と指導にあったのではないだろうか」と書いていらっしやいますね。

高橋 保育者の人間性は、いつの時代も変わらずに大切なんだとあらためて思いました。要領が変わったからといって、それに合わせて保育者の人間性も変えていくものではないでしょう。要領が変わっても変わらなくても、人間性を向上させて、自分を変える努力をしていかなきゃいけないと思う。何が変わっていくのかというと、子どもを見る見方であったりとか、それを誰かに伝えていくときの伝え方とかなのかなと思います。

より良い保育とは

宮里 長く保育の現場にしていると、十年に一度、改訂というタイミングに出会う。今私はこども園という場にいる。この時に、幼稚園・保

育所・認定こども園、三つそろっての要領・指針の改訂とか、その内容の特に教育の部分が擦り合わされたと聞くとワクワクします。すごく印象的な今回の改訂だと思っっているんですよ。

ところで、改訂はどうして十年に一度なんでしょうね。改訂は急に行われるのではなくて、長い時間を費やして改訂作業の準備をしている。たぶん平成元年の改訂にもいろいろなことがあったんでしょうね。

今回の改訂では、非認知的能力の部分ではお茶の水女子大学附属幼稚園の研究データ、その前の改訂ではお茶大幼・小で取り組んだ接続期の研究データも根拠資料になっています。現状と課題、そしてその解決のための実践の成果をもとに改訂が提案されている、そう考えるとすごいことだと思えてきます。改訂の根拠の部分、時代背景の部分、未来予想図の部分に今は非常に興味があります。



倉橋が「新鮮度の更新」という言葉を書いていて、一九五一年の本誌三月号の巻頭言にある言葉なんですけれど、この言葉は、私の好きな言

葉です。要領の改訂の中で、「環境による教育」とか「一人ひとりを大事に」と聞くと、今まで通り、と安心してしまふ。ゆるがせにできない根本はあると思いますが、新しい提案を受けて、何か加味しよう、何が大事なのかを考えてよう、というのがいいなと思います。

原口先生の言葉の中でも、これまでに大切にしてきたことを確かめつつ問いを発している。「保育は教えられない」ということや、どんな人でも「ある程度は育てていける方策を考えなければならぬ」と言っている。環

境による保育というものは簡単なことではないと言っている。原口先生は真髓を捉えて警鐘を鳴らしていると思う。そのことは今も課題だと思う。良い保育ってどうやって伝わるんだろう、より良い保育ってどうやって実現するんだろうということに関しては、答えが見つかっていないなと思います。

保護者にどう伝えるか

上坂元 保育者養成から保育実践へのつながり、幼稚園教育を取り巻く状況の大きな変化を保護者にどうやって伝えていくか、改訂という機会をそれぞれの現場で実践としてどんなふうに生かしていきたいか、という三つのテーマでもう少し話を深められたらいいかと思えます。

松島 今回の改訂は、保護者の方の中で話題になっていることはあるのですか？ 実際には要領・指針を手にとられている一般の方、保



護者の方はいらっしやるのでしょうか。

宮里 課題だと思ったので、園だよりで要領・指針の改訂について連載しています。「10の姿」「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」はチェック項目ではないことなど、保護者にわかりやすく伝えていく、関心をもっていたことが大事だと思っています。

上坂元 そういうことにも関心をもってもらい働きかけをされているんですね。

宮里 アクティブ・ラーニングという言葉を聞くと、「乳児のうち」に何をやればいいですか? という質問が来るということを聞いたことがある。アクティブ・ラーニングとか英語とか、小学校教育で導入が検

討されていることへの関心は高いようです。

上坂元 確かに、小学校の英語の影響は感じますね。幼稚園にいらした外国のお客様に子どもが話しかけたりするのを見ると、ほほ笑ましいですが。

宮里 小学校は「教科」なので、一般の人からも関心が寄せられるけれど、幼稚園は、例えば「環境による教育に今度からなりますね」なんてニュースで取り上げられないものね。

上坂元 三十年前、原口先生の記事にこのように父母を啓発していくことが書かれていて、これは現在の私たちにとっても大切なことですよ。

高橋 遊びや環境を通して子どもたちが考えたり試したりして、いろいろな力を発揮していることは、日々の掲示や各学期末の保護者会で、パワーポイントや写真を通して伝えていきます。

宮里 今の保護者は幼稚園に対して何を考え

ているんでしょうね。何を期待しているかしら？

上坂元 今日も登園のときに玄関で、三歳児の保護者が「これまであまり考えていなかったのですが、自由保育の厳しさというのが少しわかってきました」と話してくれました。こちらから保護者に伝えようとすることで保育者の理解が進むこともありますね。

変化を肯定的に

宮里 今回の改訂はこれまでとあまり変わりません、という説明を聞きます。なぜそのように言うのかしら？

上坂元 変わらないけれども変わる、と研修の場でも説明されています。

浜口 小学校に比べると幼稚園のほうは、今までの要領が現場で受け入れられているから、変わらないほうが安心する。平成元年の改訂で良いものになったという前提があつて。変

わることについて
も、時代の状況に
応じて変わる、と

いう意識だから

要領に対する信頼
度が高いと思う。

小学校のほうは、
英語が入ったり、

道徳科ができたり、
不安や反対意見が

たくさん出やすい
ように変わつてき

ている。平成元年の改訂はかなり大きい変化
だったけれど、今変わるつて言つても、幼
園では危機意識が少ないのかもしれない。

だから、今度、「10の姿」がすごく大きい
変化で、ツツコミどころになっている。良く
読もうとしたら良く読める。悪くも読める。
まずは肯定的に受け取れば、変化を良いほう



に読める。ちょっと保育理解に近い感じの話ですが。

宮里 「10の姿」の文章を読んでいくと一つ一つの言葉が選り抜かれていると感心します。長い文章を文節で切っていくと、幼児期にこのことをポイントに置いたほうがいいということが見えてくるように思う。

例えば「(8)数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」の説明のところ、「親しむ体験」に加えて「自らの必要感に基づきこれらを活用し」とあります。「親しむ」ってさうつと言わないで、あえて「必要感に基づき」という文章を入れたことに興味が湧きます。こんなふうに、文節で切って読み解いていくと大切なポイントが見えるように思います。

松島 今お話しくださったような内容は、園の先生方とも一緒に共有して話されたりするのですか？

宮里 日々、忙しい。でも、話さなきゃね。

「10の姿」をどう読むか

浜口 「10の姿」はどう思う？ 高橋先生は、どんな印象ですか？ 違和感とか。

高橋 一つ一つの言葉に違和感はないです。パツと見たときは、卒園までに育てるって？ と思いましたが、「育ててほしい姿」と書いてあることで、教師や園が「育てたい」とは言っていないことに少しホッとしました。

浜口 そういうふうに読んでいるのですね。

高橋 そこまで「育ててほしい」と言われているとはあまり思ってたなくて。

宮里 柔らかく捉えるのよね。

上坂元 到達目標ではないということですね。



高橋 私は、小学校の先生にとつてもしこれがとてもわかりやすいのであれば、活用しようと思う。



上坂元 「10の姿」を手がかりに研究会をもつとか、公開保育をするとか、さまざまに考えあうきっかけになるのでしょうか。

松島 私は、「10の姿」が到達目標ではないと説明され、何か懸念を内包していることを表に出しているようで、不思議に思うことがあります。

宮里 この点についての説明を聞いてみると、小学校との接続を考える上で有効だということも説明されていました。一律に何らかの目標を定めることへの懸念も感じられました。懸念をもちながら提案しているという珍しいケースのようにも思える。

松島 告示という形で出ているけれど、試みのなどところがあるようにも思います。保幼やこども園と小学校以降の育ちのつながり、連携や接続という課題を解決するために、一つ後押しするきっかけにしたいという意図があるのかもしれませんが。それは実際動き始めたところで、保育現場の先生方と小学校の先生方、双方の現場からの声が大事なのではないでしょうか。伝えあうところで難しさがあったら、そこをより良くしていく必要があると思います。

上坂元 応答的につくられていく教育課程となれば、とてもすてきですね。

根っこを育てる

宮里 もう一つ言いたいことがあります。私が好きだったのは「社会に開かれた教育課程」という言葉です。社会に開かれた教育課程という言葉が意味することって何だろうと考え



ています。より良く生きるということだった
り、より良い社会をつくるという目標を共有
し、社会と連携するってことだったりする。
「社会に開く」というのはどういう意味なの
かしら？ 地域に開かれた教育課程をどうつ
くるかは、大きな課題なのではないかと思う。
高橋 一人ひとりの子どもが、社会に開いて
いくような教育課程、というふうに私はとっ
ていた。

宮里 一人ひとりが社会に開いていくってど
ういうこと？

高橋 幼児教育
って根幹なんだ
と思う。幼児期
に根っこをしっ
かりと張って、
社会に踏み出し
たときに、どん
な社会に対して

も、自分をしっかりとって、向かっていけ
るように。それが、社会に開いていくってこ
とかな、と。

松島 生きていく上で必要な力の基礎や根っ
こを育てていく時期は乳幼児期だと本当に思
うので、その時期にどういう過ごし方をする
かということや、保育の現場での保育のあり
方は、世の中全体において、もっともっと大
事に丁寧に考えられてもいいんじゃないかと
思っています。

高橋 社会に参加できる人間とか、社会をよ
り良くしていくためのことを考えていく人間、
しかもそれが一人の考えではなく、みんなで
連携をとりながら、いろんな人のことを考え
ながら、いろんな国のことを考えながらやっ
ていけるような人に、やっぱり育ってほしい。
そのための教育を考える。

宮里 社会とはどういうことか、これは、キ
ーワード。

上坂元 「社会に開かれた」というと、原口先生の保護者の啓発というところも伝えていくのかなと思いました。

浜口 今は保護者と園が対等で、パートナーシップという言い方もしますね。

上坂元 この改訂を通してそれぞれの実践がどう変わったか改まつたり、考える機会が生かされたかということは、また別の機会に譲りたいと思います。

松島 原口先生が書かれているように、改訂された要領・指針を読むことで、あらためて保育について学び、見直しの機会を得ることができました。

(二〇一八年一月二十六日)

